
妹は裁縫が下手だ。

メネ@未確認

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹は裁縫が下手だ。

【Nコード】

N0491V

【作者名】

メネ@未確認

【あらすじ】

某企画参加作品。今更？ ええ、今更です。＊

いつの間にか、僕は妹に両手足を縛られていた。なんと妹は、魔王を名乗る何者かに憑りつかれていたのだった。そして始まる、地獄のような時間――。果たして僕は、生きて明日を迎えられるのか？
今ここに、平凡な大学生と魔王との戦いが始まる！ そんなお話。ただし、嘘が98%ほど含まれています。

(前書き)

某掲示板のお題より。

感想、その他諸々ございましたらお気軽にドゾ。

(・ω・) メネ

「あ、……あのう、これって、どういことです……?」

上手く機能しない脳を最大限に使って、ようやく出てきた言葉がそれだった。

実際、どういことなのか全く理解できていない。確か大学から帰ってしばらくネット鑑賞をして、突然誰かがノックしてきたから部屋のドアを開けて、……ええと、それから。

「見て分らないの? 大学生のくせに、意外と馬鹿なのね」

考えている最中に、目の前の少女が言い放った。いつもより三割増しで艶めかしい雰囲気になっているのだが、この少女、

僕の妹である。

「い、いや、よく分らないんだけど」

本当によく分らない。どうして僕は、両手足を縛られて妹から足蹴にされているのだろう。友達が聞いたら喜ぶというか悦びそうなシチュエーションだけれど、体験している本人からすれば何も悦べない。

しかも妹の服が、なんていうか、……大人っぽい。胸元が大きく開いた赤いドレスなんて、本来高校生とは無縁なもの。一体、どこで買ったのかな。

僕が意味のない感慨にふけっていると、妹が喉のあたりを指先で撫でてきた。白く細く、まるでピアノリストを彷彿とさせるようなその綺麗な指に、思わず見とれる。

「……本当に、馬鹿ね」

呆れるようにして妹が呟き、それからゆっくりと顔を近づけてきて――

ああ、良い匂い――

そして僕の唇と妹の唇が――

「いや駄目っ！　だ、駄目でしょこういうのは！」

触れ合う直前、なんとかして叫んで妹から離れる。離れるといってもベッドに頭を埋めて、ほんの数センチ沈んだだけだ。しかし、それでも最悪の状況を免れただけで良しとしよう。

チラリと妹の顔を盗み見ると、なぜか驚愕の表情を浮かべていた。なぜ驚く。むしろ積極的に求める方が驚きだろうに。それ以前に、その驚愕はこっちのセリフ……もとい、顔だ。ある日突然妹からこんなスキンシップがあったなら、誰にだって驚く権利が与えられるだろう。

妹が表情を変え、代わりに薄ら笑いを浮かべる。それから一言、発した。

「まだ、状況が分かってないようね」

「分かる方がおかしいって！」

「分からない方もおかしいわ。……ねえ、」

私のこと、嫌いなのか？

唐突な質問に、僕は言葉を失う。

嫌いかと問われれば全力で否定できる。なら答えればいいじゃないかと思われるかもしれない。でもきつと、「嫌いじゃないよ」というだけでは、妹は満足しないだろう。

そしてきつと、さらにこう尋ねる。「私のこと、好き？」と。

僕はそれに答えられない。確かに僕は、妹が好きだ。けど今、妹が求めている「好き」は、僕の考えているものじゃない。

だから――答えられない。

「やっぱりね」

やがて妹が言った。その言葉が何に対してだったのかは分からないけれど、なんとなく、妹が納得したということだけは理解した。そして掴みあげていた胸倉を放——さなかった。ていうか思いつきりブラウス引っ張ってるんですが。ちょ、ちょっと待ってそれ以上左右に引っ張ったらボタンが千切れるやめてー！
プチン。

閉じきった部屋の中で、軽快な音が鳴る。

僕の思い虚しく、結局一番上のボタンは取れてしまった。コロコロと部屋の隅へと転がっていく。

「あの、ボタン……」

「今のあなたに、命令できる権利があると思ってるの？」

言い終わる前に、妹に言葉を切られた。

ただボタンが取れたことは少なからず影響があったらしく、残り手作業で外していく。少しして、ようやく全て外され、僕はめ得太く上半裸になった。

……って何してるんだ妹よ！

「や、ちょっと、そのう、やめてください……」

「あら、嫌よ。あなたは今夜だけ、私に服従するのよ。つまり私は一夜限り、魔王として君臨するの」

高慢に言い放ったそのセリフだけれど、どこか恥ずかしそうに言っているようにも見えた。きつと気のせいではないだろう。

妹は寝そべった僕に抱きつき、それから、耳元でそっと囁いた。

——今夜だけ、お願い。

そしてそれを振り払うかのようにして、首筋に舌を這わせる。

ああ——と、僕はいつの間にか呻いていた。

鳩の鳴き声が聞こえる。

知らぬうちに、朝になっていた。いつ寝たのか、それとも寝なかったのか、よく覚えていない。

ただブラウスのボタンが全部きつちりと留められているから、もしかするとあれは夢だったのかもしれない。それにしてもやけにハッキリしていたなあ、と思う。夢だろうか、本当だろうか。

まあいいか――。

そう思って、服を着替えようとブラウスを脱ぐ。そして、ハッと気が付く。

一番上のボタンが、なんとも不恰好に縫い付けられていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0491v/>

妹は裁縫が下手だ。

2011年10月8日06時47分発行